

会報

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 戦国時代の民衆のくらしぶり・・・丸山祐之
- 2～4 安曇族の誕生・・・刈間健志
- 4 新刊紹介「海人族の古代史」・・・古川幸男
- 5～7 <邪馬台国論>を読む・・・鈴岡潤一
- 8～9 イゴ（エゴ）の謎・・・平林厚美
- 10～12 白村江の海戦と阿曇比羅夫・・・川崎克之

発行責任者 安曇誕生の系譜を探る会 会長 丸山祐之
編集委員長代行 松尾 宏 事務局長 川崎克之

〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3 ☎090-5779-5058



photo 川崎克之

戦国時代の民衆のくらしぶり

会長 丸山祐之

作家の青山文平君とは大学で同学部、またサークルでも一緒でした。彼は出版社勤務、フリーライターを経て小説家となり、松本清張賞や大藪春彦賞をはじめ、数々の賞を受賞し、2015年に高年齢の記録に迫る67歳で直木賞を受賞しました。先日、彼の新聞への寄稿で知ったことですが、彼が何故目立った事件も大人物も少ない江戸中後期を舞台にした作家活動をしているのかがわかりました。

その彼が文中で紹介しているのは、歴史学におけるヨーロッパのアナール学派の貢献です。私には難しいことはわかりませんが、「政治周りの“事件史”や、その事件の主役になった“大人物史”だけでは、世の中が見えてこない」とのことです。例えば「ナポレオンの生涯を極めれば、フランス民衆のありのまが浮かび上がる訳でもない」ということです。なるほどというところです。

我々の会では昨年度、歴史サロンを月例で開催してきました。講師の皆さんにはお世話になりました。改めまして感謝申し上げます。昨年度は戦国時代まで時代を広げて安

曇野市教育委員会文化課の逸見大悟さんに3回に亘り「安曇野の戦国時代史入門」ということで講演していただきました。その時代に安曇平で活躍？した武将、武士とその周辺の人たちに関することが中心でしたが、時々庶民の生活にも触れていただきました。たくさんの資料を提供して頂いたのが当時の様子を垣間見る事ができましたが、青山君流に言えば、「武田信玄や小笠原貞慶の生涯がわかったとしても安曇平の民衆のありのまが浮かび上がるのだろうか」というところでしょうか。機会があれば、次はこのあたりに焦点を当てた話を伺えればと思っています。

4月のサロンでは、百瀬新治さん（前安曇野市豊科郷土博物館館長・当会顧問）に講演していただきます。テーマは「戦国時代を生き抜いた安曇野のひとたち」で、安曇平の堀金地域でいかに人々が生き抜いてきたのかという、まさに民衆のくらしぶりそのものの話になるようです。皆さんの参加をお待ちしております。

安曇族の誕生

綿津見神の後裔が安曇族になるまで 刈間 健志

「安曇族」という言葉は一つの「歴史用語」である。大正6年ごろまでに氏族史の研究途上、太田亮氏により命名され、弥生時代以前の安曇氏の先祖集団を表す概念として用いられたのが始まりである。その詳細については会報にてすでに述べた。

「日本古代氏族制度」(大正6年)の序文によると、太田氏が史学の基礎研究として氏族の調査を志したのは弱冠15歳の頃であったという。「大日本史氏族志」「新撰姓氏録考証」などを基に索引を作り、古今の文書を蒐集して「日本古代氏族制度」の稿本を完成させた大正3年頃、太田氏はまだ30歳に満たない在野の研究者であった。本の出版に向け、歴史学会の重鎮、吉田東伍氏・久米邦武氏・三宅米吉氏・喜田貞吉氏らに校閲を依頼し、細部に至るまで指導・教示を仰いだとあることから、「安曇族」の一節で述べられた内容部分にも日本歴史学会の最新情報・共通認識(歴史観)が反映していたと考えて間違いなからう。

明治という時代は国学にはじまる尊王思想が、さらに皇国思想・皇国史観へと純化され、教育のみならず植民地支配や外交政策、国政全般に影響を及ぼし始める時期に当たっている。こうした時代を背景に個別の問題として捉えられてきた「奴国」「倭奴国」「海神国」の論争にもやがて転換点がやってくる。明治も半ばを過ぎた頃、三者は北九州の一角博多湾岸の地へと急速に収斂していくことになるのである。以降「倭奴国、奴国、海神国」博多湾岸説は「安曇族」論の屋台骨を支える強力な支柱となっていく。

「ワダツミの後裔が倭奴国や奴国を建て、ついに大和王権の重臣として頭角を現すに至った」とする今日当たり前のように論じられているストーリーも実は幕末以来数多くの論者が論争を繰り広げ、その末にたどり着いた葛藤の所産なのである。幕末から明治維新にかけて国学者や歴史学者が繰り広げた古代史論争。その一端を紹介し「安曇族」が生まれるまでの状況を整理しておきたいと思う。

＜ 奴国 ＞

魏志倭人伝に登場する「奴国」について初めて言及したのは新井白石であった。「古史通或問」に「奴(ノ)国は即前に見へし筑前国那賀郡なり」と述べた。古代地名の比定地探索のため、古今の地籍名から類似する音韻を抽出し、比較検討するという方法を初めて示した。

さらにこれを発展させたのが本居宣長である。古代外交史を論じた「馭戎慨言」(ぎょじゅうがいげん)に「かの伊都国の次にいへる奴国は仲哀紀に難縣、宣化紀に那津とあるところにて云々」と述べ、「奴」と「難」「那」の音韻の類似から「奴国」を博多湾沿岸に比定した。邪

馬台国の所在地論争が今日まで続けられているのとは対照的に「奴国」の所在地について異論を挟む論者は暫く現れなかった。

ところで白石は「奴」に「ノ」のルビをして「ナ」という音読はしていない。「奴」は本来呉音で「ヌ」「ノ」、漢音で「ド」と発音される。白石はこれに従ったものと思われる。

一方、宣長の場合「奴」にルビを付していないため「ナ」と読んだか否か定かではない。しかしこのことが後々「ナ」という読みを宣長が許したかのような誤解を生んだ可能性はある。「奴国」を「なこく・なのくに」と呼び習わす習慣は少なくとも明治になってからのことである。

＜ 漢委奴国 ＞

天明4年(1784)、志賀島より「漢委奴国王」の金印が発見された。後漢書に「建武中元二年、倭奴国奉賀朝貢す。(中略)光武、賜うに印綬を以てす。」との記述がある。

「委」を「倭」と解せば後漢書の記述にぴったりと一致する。当初「旧唐書」に「倭国は古の倭奴国なり」とあるため倭国を大和国家と解する説も見られたが、金印出土地との矛盾を解消する方途に苦しみやがて後退していった。

本居宣長は金印について何の考察もしていないが、「倭国」と「倭奴国」は同一ではないとしている。その後「委奴」を「イト」と読むことで「倭奴国」を魏志倭人伝の「伊都国」に当てようとする上田秋成の説が唱えられた。この説は幕末から明治中期にかけ長らく定説とみなされた。藤井定幹・青柳種信・伴信友ら国学者をはじめ、明治に入っても歴史学会の重鎮、久米邦武らがこれに従った。

注目すべきは、西暦57年中国に朝貢して金印を下賜された「倭奴国」の後継国家が没落・滅亡・吸収などの危難を越え、国名も変わることなく邪馬台国連合の一国家として生き残っていたとする発想が現れたことである。実は「漢の倭の奴国」と三段切りに読んだことで有名な三宅米吉氏も「奴国」を「倭奴国」の後継国家とする点において本質部分では同じ発想を共有している。しかし三宅氏は「倭奴イト」説に痛撃を与え、「漢の倭の奴国」の三段読みを学会のスタンダードにまで高めたのである。

明治25年、三宅米吉氏は「漢委奴国王印考」を書き、久米邦武氏らの唱える「倭奴」を「伊都」に当てる説を批判した。「委」がワ行の「ヰ」であるのに「伊」が「イ」であること、そして「奴」は「ド」と音読されるのに「都」が「ト」であることなど音韻の不適合を批判して、これまで定説とされてきた認識を大きく揺さぶった。(「倭奴」を「怡土イド」に当てる説についても同様

の指摘を行っている。)

三宅氏はまた同論文中において、「漢倭奴国王」を「漢(かん)の倭(わ)の奴(な)国王」と三段切れに読むことを提案し、魏志倭人伝の「奴国」は「委奴国」と連続した王朝、或いは後継の王朝と見做した。その一方、記紀に記された甕縣を奴国の名残であるとして、金印の発見された志賀島を奴国王の墳墓の地であると論じたのである。三宅氏の学説は学会に受け入れられた。これ以降、100年以上の年月を経た現在でも三宅氏の唱えた「委奴国=奴国=那津=甕縣」博多湾岸説は日本史歴史学の定説となっている。

＜海神国＞

「海神の宮は海の底にある国なり。世の中のなまさかしき説どもは、古への伝えの趣にかなわず」本居宣長は「古事記伝」にこう述べて、地上に海神国を求むる説(薩摩国近くの島、琉球、対馬など実際存在する土地に比定しようとする説)を強く拒否した。

宣長のこうした古事記原理主義的態度は、尊王(信仰)と神話が不可分の関係にあることに由来する。しかし明治維新後の皇国史観は一面近代科学を礎として形成されていった。それゆえ古代史の実証的な面を否定するものではなかった。神話の一部は空想から解放され、海神国を地上に探索する試みも徐々になされるようになった。

明治26年「日韓古史断」、明治27年「大日本地名辞書」において吉田東伍氏は「海神国」を博多湾沿岸地域に比定している。三宅米吉氏の「漢委奴国王印考」(明治25)を受けて、吉田氏は「奴国」を「甕国」と表記し、「甕」はまた「那」や「娜」に置き換え可能とした。其の上で「後世に至るも海神を志賀島に祭り、(中略)豊玉姫を竈門山に祭るは甕縣の国祖が海神たりしを証明す」「神功皇后の此地に行幸し給ひ、海神の威霊によりて韓国を征服し給へるは歴史事実の上に於て海神国、甕国の同一なりしを証明す」と論じた。

＜海神を祀る志賀島。志賀島は奴国(委奴国)の領域。それ故海神国は古の奴国である。＞三段論法と皇室中心の世界観を過去に向けて敷衍する遡及的方法によって海神国は博多湾岸に位置付けられた。

何百年、何千年遡っても皇国の秩序は普遍に存在するのだから、神の祀られる場所が神の生まれた場所であるという論理は明治人にとって当然のことなのかもしれない。しかし、こうした態度が少なからず太田氏による「安曇族」の性格付けにも影響を及ぼしていることに留意しておきたい。

＜「安曇族」誕生前夜＞

こうして見てくると、明治27年までに「安曇族」の出自・由来・出身地に関わる要件のほとんどが出そろっていると確認できる。そしてそれは当時歴史学会において

定説になりつつあったようである。このことを示す文章を久米邦武氏が記している。

「博多の前なる志賀島に海神社あり。安曇氏の裔連綿として之に奉仕し、天明年中に漢委奴国王の金印を此島より掘出せり。博多の住吉神社は当社の根本にて博多は多く其地にかかる、此を古の那津とす。安曇郷は粕屋郡の海岸にあり。漢委奴国とは漢の倭の奴国と訓む、最近来考定の説にして、奴国は即ち那国、仲哀紀の甕縣なることもすでに一定し、甕縣は古の海神国なるは明白になれり。」(「大日本時代史・日本古代史」明治40年)

かつて三宅氏から批判のあった「委奴」=「伊都」説を自ら改め、また「甕縣」を地上に実在した「海神国」と断じる吉田氏の説を認めて、「委奴国=奴国=那津=甕縣=海神国」博多湾岸説の要旨を余すところなく述べている。

太田氏が「安曇族」の存在を世に問うわずか十数年前、「安曇族」概念の内容部分はすでに歴史学会内部のコンセンサスになっていたのである。

＜「安曇族」の誕生＞

大正6年、太田亮氏の事実上の処女作である「日本古代氏族制度」が出版される。それは研究者としての将来を決定づける著作となった。この功績が認められて内務省神社局への入局を薦められたとみられる。

太田氏はこの著書の中で「安曇族」について以下のごとく性格付けている。

- ①安曇族は海神綿津見神の子孫と伝えられている。
- ②安曇族が海人を統べていたのは、古い時代からと思われる。
- ③筑前国糟屋郡安曇郷が其の根拠地で那賀郡住吉神社は其の氏神である。
- ④粕屋・筑紫・早良の諸郡即仲哀紀の甕縣方面は其の領域である。
- ⑤安曇即海神族の建てて居た甕國が漢史に所謂奴国である。(「奴」に「ナ」のルビあり)

①-②は記紀からの引用、推測であろう。③④⑤は幕末・維新・明治期を通じ、多くの国学者や歴史学者が議論を重ねて到達した歴史学の定説を忠実にまとめたものである。太田氏は日本歴史学の成果を氏族史のなかに織り込んでこの著作を完成させたのである。

＜なぜ「安曇族」は生まれたのか?＞

それにしても「海神族」と「安曇氏」という言葉の間に何故「安曇族」なる用語を必要としたのだろうか?

太田氏は国造設置以前、未だ大和王権に統治されない地方政治の時代を酋長時代と呼んだ。この時代にも天孫・天神の後裔氏族は存在していたが、より強盛な蛮族(土蜘蛛・蝦夷・隼人・佐伯など)や地祇裔勢力に押されていた。太田氏は地祇裔に分類される集団を特に「族」を付けて呼ん

だ。すなわち「出雲神族」「山祇族」そして「安曇族(海神族)」である。(この場合、「安曇族」は既存氏族を分類するカテゴリー名である。)

氏族リストを作成する際に用いた主要な資料「新撰姓氏録」には「出雲神族」に分類される「大国主命」後裔氏族(大神朝臣、賀茂朝臣、宗像朝臣、弓削宿禰など)が多数掲載されている。これに対して「綿津見命」に連なる後裔はほぼ安曇氏と凡海氏に独占されており、記紀神話や志賀島の海神の祭主、和名抄の筑前国糟屋郡安曇郷の位置などと併せて考えれば「海神族」は「安曇氏」とほぼ同一だと言っていい。「安曇即海神族」といった表現にもそれはよく表れている。(「新撰姓氏録」に海神系氏族が少ない理由として「他の海神族はすでに滅亡していたか、或いは安曇氏の海神族統制が完璧であったか」と栗岩英二氏は述べている)

氏族史の構築を急ぐ太田氏にとって実在した氏族(生きた古代人)の出自・由来を明らかにすることは特に重要であったはずである。それゆえ、中古以降の時代を主対象とする氏族史の中では、「海神の子孫」(海神族)よりも「安曇氏の祖先」(安曇族)といったニュアンスの方

が扱いやすく伝わりやすい面もあったであろう。

ちなみに「山祇族」すなわち瓊瓊杵尊の姻族「大山祇神」の後裔を称する氏族が存在しないのは「衰微したのか、他の系を冒したのか、若しくは山祇神族とは神話上の事で実際存在せなかったか」と太田氏は述べている。

「安曇族」の真のルーツ探しを終えて、改めて疑問に思うこと

こうして「安曇族」誕生までの紆余曲折を見てきたわけだが、どのような経過を辿って「安曇族」が氏族史のタームとして”初めて”使用されるようになったのか、私は今まで誰からも聞いた覚えがないのである。太田亮著「日本古代氏族制度」(大正6年)は今でも古書店やアマゾンにて、手ごろな価格で手に入る書籍である。歴史の専門家がこれを見れば「安曇族」の生まれた由来を簡単に見出すことができるはずだ。それなのに、何故こうした事実が世に知られていなかったのだろうか。あるいは知らなかったのは我々が素人の故で、専門家は皆周知していたのであろうか。尽きない謎である。

新刊紹介

前田速夫著「海人族の古代史」

古川幸男

河出書房新社 2020.11刊



「安曇族」は、海人族とされている。海人族とは一体何なのか。海神族とは違うのか。本書の冒頭部分で筆者は次のような見解を提示されている。曰く「わが国には海人族と呼ばれる集団が存在した。海辺に住んで魚を釣ったり突いたり、水中に潜って貝や海草を採集するだけではない、航海を業として交易・通商にも

従事した。その出自を追っていくと朝鮮半島や中国南部、さらには遠くインドネシアの島々へもつながる。」

筆者の前田速夫氏は、1944年生れ、東京大学文学部を卒業後新潮社に入社され、文芸誌「新潮」の編集長などを歴任された後退職。その後は「白山信仰」等の民俗学的研究に従事されている。本書も民俗学的観点から伝説・伝承・習俗等を交えて論じておられます。章立ては以下の通り。

第一部 天界と異界

- 第1章 丹後国風土記逸文
- 第2章 海人族の原郷
- 第3章 浦島・竹取変幻

第二部 海人族と古代王権

- 第1章 丹後国の皇女達
- 第2章 ワニ氏・尾張氏・息長氏
- 第3章 天武・持統朝の深謀

第三部 エビスたちの日本列島

- 第1章 東と西の海人族
- 第2章 海人族の末裔
- 第3章 民俗の神々

帯文を一部抜粋すると、「古代海人族は天皇家とも結びついて活躍、王権を支えた。しかし応神朝期から没落、歴史の表舞台から姿を消し、零細な漁民として卑賤視されるようになるのだが……」

古代海人族は、宗像系・隼人系・安曇系の3つに大別される。宗像系は操船に優れ、遠洋航海に長じ、潜水、素潜りを得意とした。

隼人系はインドネシアが源流で、オオヤマヅミ神を奉じ、後に瀬戸内海水軍の中核として成長していく最も戦闘的な集団。

安曇系及び傍系の住吉系はインド・チャイニーズ系と言われている。船を遣い、釣りや網漁を併用し航海を得意とした。

農耕民と違い、土地に縛られることのない彼らは移動を苦にせず移住に積極的だった。日本海側にも太平洋側にも海人族が移り住んだ集落が多数ある。と筆者は論じている。安曇野と安曇族の記述もあり、その他にも大変興味深い論考もあり、本書は海人族研究を始めるに当たっては必読の一冊といえる。古代の海人族は他にどんな人たちがどんな活動をしていたのか。安曇族はいったいいつ、どこからきたのか。いた(来た)のか、いなかったのかも含めて会員皆さまの研究に期待したいと思います。

＜邪馬台国論＞を読む

邪馬壹国研究会・松本会員 鈴岡潤一

久しぶりに「邪馬台国」と書く本を読んで見た。筆者はさる方のご教示で今年初めて読んだものであるが、発行は2015年である。洋泉社編集部の編集によるが、冒頭に掲げた写真を見ると、唐古・鍵遺跡、纏向遺跡、箸墓古墳、平原遺跡と並んでいることからわかるように、＜邪馬台国畿内説＞を柱とするものである。とはいえ、「おや」と思わせる記述も目に付くので、批判的に読んで見るのも一興であろう。

『古代史研究の最前線邪馬台国』の「はじめに」が最初に読んでみたらいい、と勧めるのは、最終章「邪馬台国研究入門」である。珍しいことに、古田武彦の名がそこにあった。執筆者は、ジャーナリストであるが某私大で考古学系の博士号を取得している。この手の書物はたいてい古田武彦の名さえ挙げないが、ここでは『邪馬台国はなかった』の簡単な紹介さえしている。以下、目に留まった論点のいくつかを取り出してみたい。

「邪馬壹国」について

『古代史研究の最前線邪馬台国』の始まりは、「『魏志』倭人伝を読む」である。その著者田中俊明は、原文「南至邪馬壹國女王之所都」の読み下し文として「南のかた弥馬壹（臺）國に至る。女王の都する所なり。」としている。その注釈は、次のようである。

『魏志』のテキストとして現存最古の南宋・紹熙本をはじめ、通行の諸版本は一樣に、「邪馬壹国」と記しており、特に明・南監本は「邪馬一国」としている。しかし、これら諸版本よりも古くに成立した、多くの歴史書には、「臺」字が用いられている。『後漢書』倭伝・『北史』倭国伝には「邪馬臺国」とあり、『梁書』倭伝に「〔シメスヘンにおおざと〕馬臺国」『太平御覧』所引『魏志』に「邪馬臺国」とある。また『隋書』倭国伝は、「邪摩臺に都す。すなわち『魏志』に所謂邪馬臺なる者なり」としている。これらによれば、ほんらいは「邪馬臺国」とあったと考えてもおかしくない。『三国志』には、実際に「臺」を「壹」に誤ったと考えられる例がある。呉の孫権の兄雋の字が「聖壹」となっているが、堅の字が文臺、弟静の字が幼臺であることからすれば、雋も聖臺が本来ではないかと見られる（白崎昭一郎）。従って、ほんらい「聖臺」とあるべきものを「聖壹」と誤ったものと考えられる。以上のような点から、「邪馬壹国」は本来「邪馬臺国」とあったと考えることができ、『三国志』の版本か、そのもとになった写本が誤ったのであると考えてよい。

（『古代史研究の最前線邪馬台国』p.18）

この注釈に関する論点は二つある。一つは「邪馬壹国」

という表記が誤りであるとないつにかかわらず、いつ登場したと考えるのかという問題。もう一つは「壹」と「臺」の誤記の例として挙げられている『呉志』の人名の問題である。

まず「邪馬壹国」という表記について。『三国志』の最古の版本として取り上げているのは、「南宋・紹熙本」である。そして、「これら諸版本よりも古くに成立した」歴史書として『後漢書』『北史』『梁書』などを挙げている。『三国志』についてはその「写本の印刷」の時代を取り出し、『後漢書』以下の諸歴史書については「歴史書の成立」の時を取り出しているようだ。しかし、ここで比較した『後漢書』以下の歴史書は、いつ印刷されたものか、書いていない。ここに示されている議論だけでは、『後漢書』よりも前に成立している『三国志』が誤記であるということの証明にはなっていない。『三国志』諸版本が「一樣に「邪馬壹国」と記して」いるにもかかわらず、間違った、というなら、いつどの本においてか「邪馬臺国」を「邪馬壹国」とまちがった、というべきではないのか。その主張と根拠が示されない限り、『三国志』に存在しない「邪馬台国」という表記が存在するということはいえないし、『三国志』に記載されている「邪馬壹国」を否定することはできないのではないのか。

つぎに、『三国志』において「臺」を「壹」に間違った例があると示している人名については、古田武彦が『邪馬台国はなかった』において検証しているが、この書の倭人伝訳者は、『邪馬台国はなかった』を読んでいないようで、また、元代や清代のある種の定説であることをご存知でないようである。

古田武彦は、「壹」と「臺」について、『三国志』全巻を調査している。その中に、「呉」の孫羌と孫堅という兄弟の名についての見解がある。古田は、「孫羌の字が聖壹ではなく聖臺とする通説——元の時代の郝経と清の時代の盧弼の主張により『三国志』の誤りとされていた——を批判し、「聖壹」でよいと結論付けている。論拠として古田が挙げるのは、『三国志』の時代に「兄弟が一字を共有する」という原則はない、と論証したことにあつた（『邪馬台国はなかった』ミネルヴァ書房版p.31～35）。仮に『呉志』が「聖臺」を「聖壹」と誤ったとしても、『魏志』が「邪馬臺国」を「邪馬壹国」と誤った論拠にはならない。

そもそも「壹」と「臺」については、『呉志』まで行かなくても、間違いか間違いでないか議論できる状況がある。というのは、『倭人伝』の中に「壹」は「卑弥呼の宗女壹興」の名三回を含めて五回使われ、「臺」も「詣臺」として登場している。それも、版木版にして末尾の12行中に四つの「壹」と「臺」が集中する。どうし

たら「間違いを起こす」ものか不思議である。少なくとも仮に「邪馬臺国」が正しいとしても、宗女「壹與」を「臺與」に直す根拠になるのか、説明はできていない。

「短里説」について

距離の記事を読み始めてすぐ、「畿内説」の立場の議論ではお目にかからない、ちょっとした書き込みが目にとまった。古田武彦の「短里説」について書いているのである。

『倭人伝』の冒頭の「…其北岸狗邪韓国七千余里」について注をつけて、次のように書いている。

韓伝には韓の地が「方四千里ばかり」（約四千里四方）とあり、西岸から南岸を進めば七千余里でもおかしくない。一里の長さ後述。

（『古代史研究の最前線邪馬台国』p. 11）

この執筆者（田中俊明）は、韓国についての「四千里四方」を読んだうえで、「韓国」を通過する旅程が「七千余里」とあることにうなずいている。

この記事が興味深いのは、二つの論点に関係するからである。一つは、対馬、壱岐と考えられる島が「方四百里」、「方三百里」とある言葉の解釈に関わることである。もう一点は「里」という長さをどう理解するかという問題である。

ページを繰ると、対馬について「広さはおよそ四百里四方である」としている。壱岐も同様である。とすれば「至女王國萬二千余里」は、「12100里」とするだろうと推測するが、さにあらず。「帯方郡から女王国にいたるまで、〔あわせて〕萬二千余里ある」と訳していて、注釈に「帯方郡から不弥国まで、それぞれの里数を単純に積み重ねれば、一万七百里になる」と書いている。韓国では「方四千里」を七千余里と解釈したのに、壱岐・対馬については、「合わせて1400里」となる数値を取り上げていないのである。これは不思議な論法である。

では、「里」という単位についてはどういう立場をとるのだろうか。「一里の長さ後述」は、そのすぐ後の「始めて一海を渡る千余里」につけられた注釈である。

一尺の長さは、時代によって変遷があり、基本的には時代とともに長くなっている。例えば漢代には出土尺によっても、一尺ほぼ23cmと見られるが、唐代には30cm前後となる。魏代はその間にあり、一尺約24cmと見ることができる。そうだとすれば一歩（六尺）は約144cmとなり、一里（300歩）は約432mとなる。従って、千里で約432kmとなる。金海～対馬鶏知（けち）間は約140kmなので、三倍程度にしていることになる。そのため魏代にはそれより短い里（例えば一里を75m程度と見る）が行われていたという見方（短里説）もあるが、東夷伝で

は、玄菟と扶余（王都は吉林市）千余里、遼東と高句麗（王都は集安市）千余里としており、その実数は先の一里で計算した千里に近い。…

（『古代史研究の最前線邪馬台国』p. 12。太字は引用者）

これは不思議な注釈である。「韓」や「唐」の時代の物差しはあるので悩まないが、「魏」の物差しがない。この注釈は「時代とともに長くなっている」と推論したので、その中間くらいと推測する。しかし、実際とは合わないの、「三倍程度にしている」と判断している。最初の推測を修正しないで、『倭人伝』の記述が事実と違う、ということにしている。また、先述の「韓国」の「方四千里」と比較することをしていない。いずれにしても、この距離観については、「そうだとすれば」という推測の上の立論だ、ということをも正直に告知していることを忘れないでおう。

もう一点、「短里説」に触れていることは珍しいのではないか。「一里を75m程度と見る」とは、古田説である。「短里説がある」としながらこの数値による検証はしていないのも、不思議である。ここで挙がる「歩」という単位は、卑弥呼の墓にも関係するので、その注釈に飛んでみよう。

…家の大きさ「径百余歩」は、一歩が144cmであり、百歩は144mとなる。径百余歩とは、直径が150mほどあることを示す。卑弥呼の墓としてよく注目されるのは、箸墓古墳である。後円部第一段の直径は156mである。

（『古代史研究の最前線邪馬台国』p. 47）

「百歩は144m」が知らないうちに一割近く水増しされて「156m」になる論法は聞き流すことにする。しかし、興味深いのは、「短里説＝一里75m」を付記したことである。この数値を使えば、卑弥呼の墓は、100歩＝約25mの円墳となる。いたずらな推測は避けるべきかと思いつつも深読みすると、「いまは一応書いておく程度にするけれど、いずれもう少し踏み込んで検討する必要がある」というたぐいの認識を示すのではないだろうか。

「景初2年」を巡って

『古代史研究の最前線邪馬台国』には、もう一篇興味深い論文がある。国立歴史民俗博物館教授仁藤敦史「卑弥呼は倭国、それとも邪馬台国の女王だったのか」という論文である。興味深いのは、卑弥呼の遣使を「景初3年」とする通説が教科書をさえ支配するのに対して、この論者は明確に「景初2年」が正しいと書いていることである。

仁藤氏は、『魏志東夷伝序』を読むことから説き始めている。『東夷伝序』とは、古田武彦が「会稽東治」と

いう語を解釈するに不可欠として注目する『東夷伝』全体に関わる序文とする一節である。

筆者も、2020年11月の古田史学の会「八王子セミナー」での報告で『東夷伝序』を読むことを重視した。そのいくつかある論点の一つは、『東夷伝序』にある「景初年間の大遠征」の記事である。仁藤氏も、『魏志韓伝』中にある「帯方太守劉昕・楽浪太守鮮于嗣」による二郡平定記事と併せて読み、『倭人伝』の「景初2年6月」の卑弥呼の遣使が「景初3年」の誤りではなく、書かれた通りの期日の遣使の可能性があると判断しているのだ。「景初4年鏡」の存在から、都市牛利らの帰国を「正史元年」と推論する陳腐な議論も含まれるが、それは置くとして、次に掲げる推論は読むに値する。

後世の史料における239年（景初3）への年号の変更は、おそらく『晋書』倭人伝が、年紀を掲げず「宣帝が公孫氏を平ぐるや、其の女王、使いを遣わし、帯方に至り、朝見せしむ」とした要約的な記載を根拠に、卑弥呼の遣使を238年（景初2）8月の公孫氏滅亡以降と判断して、『三国志』の238年（景初2）6月の年紀を単純に翌年6月に変更したものと考えられる。『晋書』とほぼ同時期に成立した『梁書』倭伝が「魏の景初3年、公孫淵の誅せられし後に至り、卑弥呼初めて使を遣わす」と断定するのは明らかな改変である。おそらく『晋書』は、宣帝（司馬懿）の功績を強調するために、『三国志』に時期が明記されていない二郡の制圧も公孫氏の滅亡と一体的に記載したため、「二郡の制圧→卑弥呼の遣使→公孫氏の滅亡」という本来の前後関係に微妙な齟齬が生じ、「公孫氏の滅亡＝（ママ）二郡の制圧→卑弥呼の遣使」の順に修正されたと考えられる。

（『古代史研究の最前線邪馬台国』p. 200）

通説とは違い「景初2年」を正しい読み方だとする論者が『日本書紀』を拠り所に議論する「邪馬臺国」論者の中にもいることに驚きつつ、おおいに歓迎したい。筆者も、ちょうど2020年に、仁藤と同様に「景初2年」関係記事を『魏書』の各所に探し、卑弥呼の遣使として示される「景初2年6月」を帯方・楽浪二郡平定の時を示すものと考えてみた。そうした知見に照らして、仁藤氏の議論は丁寧な論証であると考えられる。

以上、『古代史研究の最前線邪馬台国』のすべての論点に触れるものではないが、とりあえずのまとめとして述べたいことは、『邪馬台国』論であり『邪馬壹国』論ではないとしても、古田説に関わる議論がそれとなく入りこんでいる所が興味深いところである。今後も注意して「邪馬台国」論者たちの議論の先を見続けていく必要があるだろう。

〔参考文献〕

洋泉社編集部編『古代史研究の最前線邪馬台国』

洋泉社2015年刊

古田武彦著『邪馬台国はなかった』

ミネルヴァ書房2010年刊

＜付記＞

NHK松本文化センターを会場にして、私が担当する『考える日本史』という講座があります。この3月で、20回となりました。今回は、「伊都国とは」と題して、三雲・井原遺跡群と平原遺跡を中心とした考古学データをまとめてみました。結局、その準備のために当地の発掘調査に長くかかわった柳田康雄著『伊都国を掘る』を読み進めるような形に落ち着きました。この本が面白いのは、鏡について詳細に論じているからです。古田武彦は鏡の文字を論じ始めた最初の実証者ですが、柳田はその「裏文字は国産」という論理を借用するなど、平原遺跡の大型内行花文鏡ほか40面を一面を除いてみな国産だとしています。のみならず、「伊都国」領域と考えることができる一貴山銚子塚古墳出土の「三角縁神獣鏡」についても論じているのです。それも、「国産である」と。

この5年ほど前から、柳田康雄氏が少し忙しくなったのは、「硯」が発見されたからです。過去の調査で「砥石」とされた石に硯が交じっていて、その確認に追われているようです。

硯の最初の発見地は、実は伊都国の三雲遺跡です。いくつかの報告書を整理してみると、その発見地は、細石神社のすぐ北側です。こうした話題も、伊都国をおもしろくさせてくれているように思います。

この準備の過程で見つけたもう一冊の書物があります。関川尚功著『考古学から見た邪馬台国大和説一畿内ではありえぬ邪馬台国』という本です。奈良盆地で発掘調査をしてきた考古学者が、その立場で、「邪馬台国は畿内に存在したとはいえない」と明言しているのです。次に挙げるような主張がはっきりなされています。

- 1 奈良盆地の環濠集落は、北九州と比べて決して大きいとはいえない。
- 2 弥生時代の墳丘墓である方形周溝墓は、奈良盆地には少ない。
- 3 奈良盆地に外部から持ち込まれたと考えられる土器の半数は東海系土器である。
- 4 三角縁神獣鏡は、箸墓古墳が4世紀成立ということになるとすると、邪馬台国とは時代も地域も異なる鏡である。

2020年に出版されたこの本は、日本古代史における＜スターリン批判＞になるかもしれないと感じています。スターリンとは旧ソ連の独裁者で、従属することで生き延びていた東欧諸国に大変動が起きました。激震がすでに起こっているかもしれません。

イゴ（エゴ）の謎

平林厚美



◆イゴ(エゴ)ってなに？

「イゴ」（以降エゴと表記）を皆さん食していますか。ご当地グルメとは異なる各地域に根差した不思議な食べ物ではないでしょうか。私も小さい時からお盆やお祭りなどのときには食卓にあがっていたので、現在は好物になっています。自分でも時々「えご草」をスーパーマーケットで購入し、天日に晒すことなく

黒い顔のエゴを練り上げて固め、羊羹のように切り酢味噌などで食べています。母によると祖母はエゴを天日干しにしてゴミを取り、白色にしたエゴを作っていたと話しています。ウィキペディア情報では、海藻の1種で分類は真正紅藻綱イギス目イギスコエゴノリ属エゴノリ（種、和名）と言い、この海藻を乾燥させたものを「えご草」、この原料を煮て固めたものを「エゴ」と呼んでいます。この不思議な「エゴ」に魅せられた一人として、その謎に迫って行きます。

・博多のオキュウトと同じもの(エゴ)がなぜ北安曇郡池田町にある不思議？

信濃安曇族関係の著者坂本博氏は、福岡県出身で結構オキュウトを食べていたようですが、長い間関西に住み、それから松本にやって来てもこれらの土地でオキュウトに出会ったことが一度もなかったそうです。それが松本の北20キロの池田町でオキュウトに再会したことにより、安曇族の信濃入りと「エゴ」の関係に着目しました。1986年の信州大学教養部の紀要に、エゴの分布状況とエゴ喫食状況から筑前を本拠地とする「あづみ族」が信濃の北西部に入って来たと推定をしました。この発想は以後変わることはない視点となっています。

◆「エゴ」の喫食率の境が不思議

民俗学の田中磐氏は著書「しなの食物誌」（昭和55年発行）の中で「ハレの日の海の幸の一つ」であると紹介しています。ハレの日とは、非日常的な祝祭日のことです。また、「えごを食べていると腹の虫が少なく、長生きすると人々はいう」ともあります。そして、「大正時代の郷土史の書物には、えごは南安曇穂高町の大門以北の地方に限り食用するとある。ところが、近年の民族調査で、ずっと南の東筑摩郡犀川沿岸でもえごが用いられていることがわかり、これからも視野を広げて調査すべき必要がますます痛感されている」と結んでいます。

大町市の「塩の道ちょうじや」は千国街道と「えご」について、「この道を運ばれてきた海の食材のひとつが「えご草」で、えごがいつ頃から食べられてきたのか定かではありませんが、大町周辺の地域では昔からごちそ

うとされてきました。更に、千国街道沿い、大町・穂高あたりまではえごを食べますが、松本ではあまり食べる習慣がなく、これは北の方からえご草が売れていき穂高あたりで売り切れてしまったとも言われています」と説明しています。

長野県短期大学の伊藤先生の手によって解明された南北安曇郡の町村別の詳細な調査報告から、坂本博氏は大学の紀要にその喫食率を地図に書き込み、その資料によると、小谷村(98%)、白馬村(93%)、大町市(83%)、松川村(86%)、池田町(92%)、穂高町(64%)、豊科町(19%)、堀金村(7%)、三郷村(3%)、梓川村(0%)となっています。坂本博氏は、「信濃安曇族の謎を追う」の中で、烏川がエゴ食用の境界線をなしているようだ、と言っています。海を渡った安曇族がなぜ川を渡れなかったのかという疑問を持つ人もいるかもしれません。坂本氏はまた北信地域の喫食率についても言及し、エゴの南限が山間部で停止していて、稲作など農耕に有利な善光寺平までは進出していないことがわかと指摘しています。エゴ喫食分布から坂本氏は、北安曇郡に関する限り、エゴ草の輸入だけではなく、エゴを食習慣に組み込んでいた人々の大規模な移動が行われた可能性が大きいと想定しました。

◆越後えご保存会情報

新潟県長岡市にエゴに並々ならぬ熱意をもっている人々がいます。その団体は「越後えご保存会」といい、その事務局は株式会社猪貝にあり猪貝氏がその会長職として運営されています。保存会の目的は、越後の郷土食であるエゴを基に、地域の食文化を楽しみ、守り、広め、次世代に継承、地域社会の発展に貢献することとしています。2012年にはエゴの食べ比べやエゴについてのクイズやトークなど行い、第1回えごリンピックが開催されています。そして独自にエゴの日を5月15日に制定しています。会の活動は、エゴの歴史的資料の文献調査やその文化、地域ごとに採取された原料、その採取方法、エゴのレシピ、流通経路など様々な角度から調査の全国展開を行っています。

・えご草の採取方法

もぐり、サオ、拾いがあり、もぐりは海女さんが潜って採り、サオは船の上から道具を使って採る方法で、拾いは海岸に流れ着いたものを採る方法です。えご草を販売するまでには、漁を終え、陸にあがってから仕事が大変であるといひます。エゴに混じったゴミを取り、乾燥させるまでが一日の仕事。素早く干さないと、エゴの一部に赤い変色が起こるといひます。

◆えごレシピの不思議

えご草を洗ってそのまま煮溶かすと黒っぽいエゴになり、えご草を天日に晒すと白っぽいエゴとなりますが、

晒す地域と晒さない地域があります。ここに宗教的な意味があるのかと疑問が湧いてきます。一般的に耳にする食べ方として、酢味噌、辛子味噌、酢醤油、生姜、わさび、大根おろしなどをかけて食べる方法があります。

・大町市の塩の道ちょうじやが「えごレシピコンテスト」で紹介したレシピ：エゴの味噌漬け(グランプリ)、エゴ+塩とごま油(準グランプリ)、あんみつ風エゴゼリー、エゴ安倍川風(黒蜜がけ)、エゴと豆のカラフルサラダ、エゴ豆腐よせ、エゴとろろ、みたらしエゴ団子、エゴチョコなど。

◆エゴの呼び名が地域により異なる不思議

安曇野地域は一般的にイゴと呼ばれていると思います。北安曇郡はエゴと呼ばれているようですが境がわかりません。青森では「エゴ天」、新潟もエゴですが佐渡ではイゴネリ、京都ではウゴ、鳥取県では「イギス」、島根県浜田市では「ウキウト」、福岡では「オキュウト」と呼ばれています。エゴにあたる漢字や語源について知りたいと思っています。

◆エゴが文献に登場した時期について

・1681年の高田藩資料に登場(情報提供者 越後えご保存会 鷲山厚氏)

『新潟史学75号』に記載された上越教育大学教授朝倉有子氏が紹介した文書にみられます。それは新発田市立図書館所蔵の溝口家文書に含まれる史料で、「高田城内御詰之面々御米受取帳」の中に、関所や番所で改める品の中に『いこ』があり、海藻のえご草を指すと思われるが、統制品であったのは意外であると浅倉氏はコメントしています。

・博多の「オキュウト」

坂本博氏が「信濃安曇族の謎を追う」の中で、博多のオキュウトは享保年間(1716-1736)、今の福岡市東区の山本喜七が博多湾内のエゴノリから製造して、販売したのが最初であると言われている、と紹介しています。

・佐渡の「いご」の文献(佐渡博物館情報) 江戸時代の佐渡の文献に記載の「いご」:

- ①『佐州産物志』(1735年)・・・「海藻菜糧方言未考分としてイゴ・略・イギス」等
- ②『佐渡年代記』(1751年)・・・「島外移出品目として・いご」
- ③『島根のすさみ』(1841年)・・・「いごめし」

『佐渡のたべもの』(昭和26年 山本成之介著)ではイゴは冬季の食べ物に分類分けされており、「海藻の一種なるエゴ海苔を煮てとかし薄板状に凝固させたエゴネリは、冬の最も親しまれている食品の一つである。」と記載があるようです。このイゴネリの形状は、薄くのばしてソバのように細く切って食べるようなので、九州の博多のオキュウトと似ているため何らかの交流があったのかもしれない。

・田中磐氏は著書「しなの食物誌」の中で、佐渡ヶ島の「鏡いご」についても紹介しています。「すなわち「え

ご」を溶かした液体を皿などの中で固まらせ、まん丸い鏡の形にして神仏に供えるという供え方が同地方であったことである。「えご」が信仰的な面を多分に持つことの一面をうかがい知り得るような感がある。」

◆エゴノリの一生は不思議(越後えご保存会会報「えご便りNo. 83」令和2年2月26日発行より抜粋)

【季節とエゴノリ】

冬: 種(果孢子)がホンダワラ類に付着

春~夏: ホンダワラ類に絡み付いて生長

夏: 成体(四分孢子体)となる(この時期がエゴノリの漁獲時期)

秋: 成体は成熟し、孢子を放出

冬: 孢子が雄と雌の配偶体に生長、受精、種(果孢子)の放出

【エゴノリ増殖定着促進研究】(山内弘子氏)

エゴノリの人口種苗添加による増殖試験の報告によりますと、エゴと水温との関係を次のように紹介しています。

「水温11℃以下の条件では、鉤で海藻に活発に絡み付き繁殖するが、それ以上に昇温すると鉤では絡み付きにくくなり、これを補うように体での付着が活発になると思われた。しかし、21℃にまで昇温した場合、体で付着できなくなるため、海藻から直ちに流失する可能性があると考えられた。」

・エゴノリの漁獲量が減っているという情報がありますが、これは温暖化のためかもしれません。

◆エゴの存在はいつから

エゴを最初に口にした人はどのような人でしょうか。テングサやオゴノリはトコロテンの材料として奈良時代には食されているようですが、エゴノリに関しては古い情報が見つかりません。古代藻塩作りの時に、ホンダワラを使用してかん水を作り、塩を作る製法があります。その際ホンダワラに付着したエゴノリがエゴになる可能性を想像します。

原料があるのにエゴを作らない地域、原料がないのにエゴを作る地域があります。今でもエゴを食べない地域で、エゴを食べる人の理由に、母や祖母が食べる地域の出身ということばをよく耳にします。その意味では、伝統的な食品として継続して食べてきた人の集まる地域が今でもエゴ喫食率の分布図となっているのかもしれません。この不思議なエゴについてこれからも向き合っていきたいと思います。



我家のイゴ

白村江の海戦と阿曇比羅夫

川崎克之

毎年9月27日に穂高神社で開催されるお船祭りは、古代に日本・百済の連合軍と、唐・新羅の連合軍とが朝鮮半島の白村江で戦った海戦を再現したもので、戦死した日本水軍の大將阿曇比羅夫の鎮魂の祭りだと、いつの頃からか言われるようになった。しかし、昔からそのような話でお船祭りが行われてきた訳ではなく、昔を知る地元の方によれば、この祭りは五穀豊穡と子孫繁栄を願って男女の行為を表したものだという。「合戦」ではなく「合体」というのが相応しいのだと。

安曇野に安曇族が入植したかどうかは別問題として、穂高神社に立像が建立され若宮に祀られている阿曇比羅夫は、碑文通りに白村江で戦死したのだろうか、また、白村江の海戦とは何だったのだろうか。日本書紀を中心に検証してみたい。

白村江の戦い

当時、朝鮮半島では高句麗・百済・新羅の三国が覇権を争っていた。655年高句麗と百済は連合して新羅に侵攻、新羅は唐に救援をもとめた。660年唐は百済の都扶余を落とし、義慈王は降伏して百済は滅亡する。しかし、旧將福信など遺臣たちは百済復興に立ち上がり、倭国に滞在していた百済王子豊璋の送還と援軍の派遣を要請してきた。倭国は豊璋を百済王に即け三次にわたって救援軍を派遣するが、663年朝鮮半島西岸の白村江で唐の水軍との海戦で大敗して朝鮮半島から撤退した。

この敗戦によって倭国に危機感が高まり、律令国家の建設が加速し、また、倭国から「日本」へと国号を変えたとされる。

戦いの様相

白村江の戦いについて日本書紀の天智称制2年（663年）8月条には概ね次のように記されている。

8月27日 日本の最初に到着した水軍と唐の水軍とが合戦となった。日本は負けて退却した。

8月28日 日本の諸將と百済王は氣象を觀ずに、先に戦争を仕掛ければ、敵は自ずと退却するだろうと、隊伍が乱れたままの中軍の兵卒を率いて進み、陣を堅くして守る唐軍を攻めた。唐は左右から日本の船を挟み囲んで戦った。たちまち日本軍は敗れた。水に落ちて溺れ死ぬ者が多かった。船の舳先も旋回できなかった。朴市田来津（エチノタクト）は天を仰いで決死を誓い、齒を食いしばって憤り、数十人を殺して戦死した。この時、百済王豊璋は数人と船に乗って高麗に逃げ去った。

このように日本書紀には、朴市田来津（エチノタクト）という武將が壮絶な戦死を遂げたことは記述されているが、阿曇連比羅夫が白村江で戦死したという記事はない。もちろん旧唐書や三国史記など海外資料にも記されていない。それでは、なぜ阿曇比羅夫は戦死したことになるのか。

白村江の海戦に至るまでの三次にわたる百済救援軍と3度も重複する王子豊璋の送還記事について整理してみよう。

百済救援軍と豊璋の送還

660年7月唐の侵攻によって百済が滅亡し百済の王族がすべて唐に連行されてしまったため、遺臣の福信は当時人質として日本にいた百済王子豊璋を復興運動の盟主とすべく送還するよう要請してきた。

660年10月条には「世子豊璋及び妻子と叔父忠勝等を送る」としながら、「正しい発遣の時は七年（661）に見える」と訂正している。さらに「或本云」として、「豊璋を立てて王となし、礼を以て発遣す」とある。日本側同行者の記載はなく、福信の要請に取り急ぎ応えた形になっている。日本書紀に現れた最初の送還記事だ。

661年8月条には、前將軍大花下阿曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣ら、後將軍大花下阿倍引田比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石らを遣わして百済を救い、武器・食糧を送ったとし、続けて「別に大山下狹井連檳榔・小山下秦造田来津を遣わし、百済を守った」とある。このとき救援物資を運んだ船団は、河辺百枝臣や守君大石の將軍らが戦後も活躍しており、帰還したと考えられる。

661年9月、秦造田来津（朴市田来津）ら第1次派遣軍が兵5000余をもって豊璋を護送している。2度目の送還記事だ。將軍名が前年8月と重複する。この部隊は豊璋を護って州柔城（ツヌサシ）・避城（ヘサシ）と転戦し白村江の戦いまで行動を共にしており、朴市田来津は白村江で戦死する。

662年5月、大將軍大錦中阿曇比羅夫連らが水軍170艘を率いて、豊璋らを百済国に送り即位させた。3度目の送還記事だ。派遣された將軍は比羅夫のみ。

663年3月、前將軍上毛野君稚子らに率いられた第2次派遣軍の27000人が新羅に侵攻して翌月二つの城を落とす。

663年8月 新羅が州柔城を包囲し、唐水軍170艘が白村江に陣を構えているところに、27日慮原君臣に率いられた第3次派遣軍10000人余が到着した順に唐の水軍と戦うが、苦戦して退却。翌28日には前述したような状況で唐軍に大敗する。

三度の送還記事・異なる解釈

3度にわたる送還記事について様々な説があるが、共通するのは最初の送還記事が何故か全く無視されていることだ。「旧唐書東夷伝百済」には、「僧道琛と旧將福信は衆を率いて周留城に拠って叛き、倭国に遣使して故王子扶余豊を迎え王とした。勢いづいた百済は唐將劉仁願を百済府城に包囲したが、唐からの救援軍と新羅軍が合流して攻められると、福信らは囲みを解いて任存城に

退いた。それは龍朔元年（661）3月のことだった」とある。これによれば、豊璋は既に661年3月には百済にいたことになり、最初の660年10月の送還記事のみが正しいことになる。旧唐書の記述を採用すれば豊璋の送還に関わる記事の混乱は解消するのだ。

旧唐書の記事を見れば、同じ日本書紀に基づいていながら2度目・3度目の豊璋送還について異説が生まれてしまう。

遠山美都男（白村江・講談社現代新書）によれば、661年8月条は「救援軍全体の編成とそれを統括する将軍の任命」で、9月条は「豊璋の百済王冊封に続いて行われた朴市田来津ら豊璋親衛軍の編成と任命」であり、実際の渡海は翌662年5月のこととし、この時に豊璋は5000人の護衛軍を中心にした第一次百済救援軍と武器・食料を艦載した170艘の船団とともに送還されたというのだ。これによれば662年5月のみが正しく、比羅夫の渡海はこの時の1回のみとなる。

森公章（「白村江」以後・講談社選書）によれば、662年5月条は「阿曇比羅夫の名前しか登場しておらず、阿曇氏の家記を材料としたもので、大將軍という肩書きも後になって律令条文の知識で潤色したもの」とし、662年5月の渡海には否定的だ。百済救援軍の渡海は既に661年8月と9月に行われ、そのうち比羅夫が参加した8月については救援物資を届けて帰還したとし、豊璋送還は9月が正しいとする。

倉本一宏（白村江史上最大の「敗戦」）によれば、661年8月と9月の派遣を第一次派遣とし、救援物資を送り豊璋らを護衛送することが目的で、一部の部隊はそのまま残り、第2次・3次の救援軍と合流したとしている。翌年5月には比羅夫による即位式の挙行とする。

以上のように、比羅夫が渡海したとされる662年5月について①前年に編成された第1次派遣軍の渡海。②渡海そのものがなかった。③豊璋の即位式挙行が目的の渡海、など、いずれの解釈が史実かは判断できないが、少なくとも比羅夫が白村江の海戦に参加しておらず、ましてや戦死してはいない可能性が濃厚になってきた。

阿曇比羅夫は戦死していない？

森公章説では662年5月の比羅夫の渡海はなかったとするから戦死もありえないことになるので、ここでは渡海があったとして検証してみよう。

662年5月の渡海はワイド版岩波文庫「日本書紀（四）」の註にあるように、王位継承の即位儀礼の挙行と考えられる。その時の比羅夫の肩書きは「大將軍大錦中」。しかし大錦中という冠位は664年に制定されたもので、まだこの時には存在しないが、追記あるいは追贈と解釈しても、「大花下」と同等位であり昇格はしていない。一方、661年8月の救援物資輸送に後將軍として同行した阿部比羅夫は同格の「大花下」だったが戦後に「大錦上」に二階級昇格しているから阿部比羅夫は戦死した可能性はある。このように戦後の冠位から見て

阿曇比羅夫は生還したと考えるのが妥当だろう。

662年5月、水軍170艘を率いて渡海した比羅夫が戦死したとすれば、即位式の後、海戦までの15ヶ月間何処にいたのだろうか。式典を終えて帰還したと考えるべきだろう。

また、高齢の比羅夫をサポートすべく後継者の頼垂が同行していたと思われるが、頼垂は戦後の670年に新羅に派遣されているから戦死はしておらず、比羅夫とともに生還したと考えられる。

阿曇比羅夫は武将？

そもそも比羅夫は水軍を率いるような武将だったのだろうか。白村江以前の比羅夫にはどのような実績があるか、日本書紀で見てみよう。

皇極天皇元年（642年）1月 百済に派遣されていた比羅夫が筑紫国より駅馬に乗ってきて、百済国の弔使が筑紫に到着したこと、そして百済国が大いに乱れていることを報告した。そして2月比羅夫は百済の弔使のもとに百済国の様子を探るために遣わされた。さらに2月24日 百済の王子翹岐（ぎょうき）が山背の比羅夫の家に預けられた。（翹岐＝豊璋との説があるが疑問）

いずれの記事も海戦の20年前比羅夫の壮年時代の事績で、外交官そのものの働きであることがわかる。そして、およそ15年後の斉明天皇の時代になると阿曇頼垂が比羅夫の跡を継いで西海使となっている。さらにその10年後の天武天皇3年（672）には、阿曇稻敷が筑紫に滞在中の唐使に天智天皇の喪を告げている。比羅夫一頼垂一稲敷の血縁関係は不明だが、阿曇連が外交官を輩出している一族だとわかる。

阿曇頼垂に跡を譲って引退していた比羅夫は、百済の危機に際して再び外交の表舞台に引っ張り出されたというところか。現役時代からおおよそ20年を経て既に高齢となっており、武将としての任務は困難だと思われ、戦闘に参加すべくもないと考えられる。

661年8月に後將軍としてともに渡海した大花下阿部比羅夫には水軍を率いての数度にわたる蝦夷・粛真征討の実績があるが、阿曇比羅夫には軍事面での実績が全くないことから推測できる。

軍事面での実績が全くない阿曇比羅夫が、華麗な軍事の実績がある阿倍比羅夫と肩を並べて前將軍として救援軍の先頭に立てた理由は何だろう。百済王子翹岐を一時的に預かるなど（翹岐と豊璋とが同一人物でなかったとしても）百済王室と縁が深かったためか、それとも200年以上も昔の海人の宰としての影響力をこの時代まで保ち得ていたからなのか疑問ではある。

阿曇氏の拠点は何処か？

阿曇山背連比羅夫の名から「山背」（河内国石川郡山背郷）に居住していたと思われる。「山背」は蘇我倉山田石川麻呂の本拠地である河内国石川郡の中にあり、ここでも蘇我氏との繋がりが窺える。

一方で難波には安曇江があり安曇氏の氏寺と考えられ

る安曇寺が存在した。外交官の任務からすると難波が拠点として相応しい。

難波は仁徳天皇の時代に河内湖の洪水対策で開削された堀江によって繁栄がもたらされた。大阪湾の難波津が難波堀江によって河口湖と繋がり、河内湖に流れ込む淀川あるいは大和川を遡上して内陸の河内・大和・山背へ通じる水上交通の要地となったからだ。

当会の金井恂顧問は、「仁徳天皇時代に難波堀江を開削に協力したのが安曇氏で、その結果堀江の北側に安曇江という拠点を手に入れた」としている。その後、阿曇連浜子が住吉仲皇子による皇太子暗殺未遂事件（427年）に加担して墨刑に処されて失脚、政権中央からは遠ざかったものの安曇江は確保し続けていたものと思われる。

阿曇氏は長い雌伏期間を経て、推古天皇の時代には仏教の導入等を通じて蘇我氏に接近して復活していたことが窺い知れ、孝徳天皇時代までには安曇寺を建立するだけの力を回復していたと思われる。

当時の難波には難波宮や外国使節を迎える「館」が営まれ、蘇我氏など有力豪族の「宅」もあった。安曇江は難波津に隣接して海外及び内陸との文化・物流の拠点であり、この地が阿曇氏復権の源泉となったと考えられる。

外交官活動を可能にするのは

しかし安曇江には多数の民を養うだけのバックヤードはない。すると何処の乗組員を引き連れていったのだろうか。金井恂氏によれば「安曇氏族は古くから播磨国で勢力を張っており、その後摂津国難波まで勢力を伸ばし、その後姫路の西にまで進出している」としている。播磨から摂津にかけての航海技術に長けた部民や海人を徴用したということか。しかし、航海技術を有する海人やそのネットワークを、200年以上も昔の海人の宰だった頃の影響力をこの時代まで保ち得ていたのだろうか。また、孝徳天皇時代の阿曇連の中には東国の長となっていて不法行為をして咎められたり、播磨の水田開発を命じられたりした者がおり、必ずしも海に関係ない活動もしており、この時代の阿曇氏の一族についてさらなる検証が必要だろう。

白村江など百済で戦ったのは何処の将兵か？

百済救援軍は中央貴族に率いられた西日本を中心とした国造軍だったとされる。実際、捕虜となって戦後に帰還した兵達の出身地を日本書紀で見ると、筑紫・筑

後・伊予・肥後・讃岐など、殆どが西国出身の兵たちだ。中央から派遣された将軍達が率いた兵は見当たらない。中央から派遣された将軍たちが率いた兵は見当たらない。あるいは中央豪族の軍など最初から存在しなかったのか？

百済の戦線に派遣された将軍で確実に戦死したと思われるのは、壮絶な戦死を遂げた朴市田来津のみ。生還が確認できるのは661年8月の兵器・糧食輸送のための派遣軍の河辺百枝臣や守君大石と、663年3月に渡海した間人連大蓋。阿曇比羅夫の生還については既述したが、他の将軍たちは戦後に登場せず生死不明。

帝紀の編纂に関わった救援軍将軍の後裔

天武天皇10年3月、帝紀及び上古の諸事を記し校訂させた中に、救援軍の将軍の子孫と思われる二人の名がある。その二人とは救援物資を百済に送り、豊璋を即位させた阿曇比羅夫の一族と思われる阿曇稻敷、そして第2次救援軍の上毛野君稚子の子孫と思われる上毛野君三千だ。これはただの偶然だろうか。帝紀等は記紀の原史料だとされ、日本書紀に二人の影響があったと見ても良いだろう。二人とも白村江の登場人物の孫世代に当たっているが、二人による造作、潤色はなかったのだろうか。

日本国は戦っていない？

白村江で戦ったのは九州の倭国であって日本ではなく、倭国は敗戦によって滅亡に向かい、近畿の日本国がこれにすり替わって列島を代表することになったとする説がある。所謂「九州王朝説」だ。

旧唐書には倭国伝と日本伝が併載されており、倭国はかつての邪馬台国であり、さらに遡って後漢の時代に朝貢した倭奴国であると記されている。一方日本国は、「倭国の別種」とはっきり書かれている。すると旧唐書東夷伝百済国には豊璋が援軍を請うたのは倭国だとしているから、百済に救援軍を派遣したのは倭国ということになる。となると、阿曇比羅夫や阿部比羅夫はどちらの国の将軍と言うことになるのか。

阿曇比羅夫を軸にして海戦までの流れを見てみたが、九州王朝実在説から眺めてみると、戦後処理も含めて大和王権の日本が戦ったとするには説明のつかない疑問点が幾つも見えてきた。とんでもない迷路に入り込んでいく不安もあるが、今後の課題として取り組んでいきたいと考えている。

編集後記 松尾宏

さくらの花も散って、青葉の季節になりました。安曇野の水田には水が張られ、田植えの季節へと移っていきます。

私達も勉強会の中で「米」のルーツを辿ったこともあり、まさに田園都市安曇野を感じる時です。しかし毎年東京から息子と孫が来て行う田植えを昨年同様に中止としました。新型コロナウイルスの世界的流行によって従来あった行事や冠婚葬祭も大きく変わってしまいました。

過去にも世界的に流行した感染症はペストやスペイン風邪などいくつもあり、その政治的・社会的な影響は大きかったようです。それら過去の対処法を参考に、早くワクチンが行き渡り治療薬ができ、以前のように自由に歴史談議や見学会などができることを願っています。

さて、今月は令和3年度のスタートの時です。コロナ収束までは、感染防止（密を避ける、手洗い、マスク着用）をしたうえで出来る活動を、皆さんと共に計画し実施していきます。